

佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(三)―全四巻―」講談社学術文庫、講談社 1980年5月10日刊を読む

一燈を頼め

一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只で一燈を頼め。

〔訳文〕

1. (1) 暗い夜路に行く場合、一張の提灯をさげて行くならば、如何に暗くとも心配するな。
- (2) ただその一つの提灯を頼んで行けばよいのだ。

〔付記〕 ここで暗夜というのはお先真暗な人生行路をいっているのであり、一燈とは自己の堅忍不拔の向上心ではなからうか。次に関連する話題を提供しておこう。

- (1) 『その一』 釈尊の最後の近いことを知らされて、侍者の阿難尊者は悲しみながら「わが師よ、師のなき後、われわれは何を頼りにしたら宜しいのでしょうか」とお伺いした。それに答えて釈尊はこう教えられたのであった。

「アーナンダよ、汝自らを燈火とし、汝自らを依り所とせよ。他を依り所とするな。

真理を燈火とし、真理を依り所とせよ。他を依り所とするな」

このことを法句経(160)は次のように歌っている。

“おのれこそ おのれのよるべ 他の誰に 頼られようぞ
よく 調べられし おのれこそ まこと得難き よるべなれ”

- (2) 『その二』 西田幾多郎博士の日記に次のように書いたものがある。

「一生下級の教師に甘んじて厚く道を養い深く学を研む。断じて余事を顧みず(多く成さんと浴せば一に界ならず)、事務などやるものでない。

「一生下級の教師に甘んじて厚く道を養い深く学を研む。断じて余事を顧みず(多く成さんと欲せば一に専ならず)。事務などやるものではない。

名利の念是れ吾心を乱し吾事を妨ぐの仇敵、道もこれが為に成らず学もこれが為に浅し。急がば廻れ。功を成すに急なる者は大事を成す能わず。

大丈夫事を成す唯自己の独立之れ恃む。決して他人の力をからず。便宜の地位を求めず」(明治35年日記より)

明治35年といえば博士32歳の時である。わが国最初の独創的哲学を樹立した博士の心構えは実に立派なものであったのだなあと感嘆の声を発せざるを得ない。

- (3) 『その三』 もう一つ痛烈なことばを挙げておこう。

「人、城を頼らば、城、人を捨てん。」織田信長
まことに、信長らしく、勇ましい。

P23 ~ 25

<コメント>

佐藤一斎著、言志四録(全四巻)の三巻目「言志晩録」で、佐藤先生が67歳から78歳にかけて執筆したもの。「一燈を頼め」は素晴らしい文章だ。

— 2016年8月8日(月) 林 明夫記 —